

あさきういし梅子付
水ささす

釜のあさする

ひきやうあさする釜は釜

あさのあさする

ひきやうあさ

水ささすあさ

か川ささすあさ

四季貝分し玉

春之貝

梅

真流

折撓

具名うちとちのうさ

後集はあさき梅子

直子とあさき松柳杯

色のはあさきつうく

何れもあさき梅子

但前集はあさき梅子

一 杵

西毒 火杵

碧杵

赤明切 移う撓

但し三程可用前名より
真副法見越流

又名みちより

ひとはは海へ用ハ重ハ風
多リ用糸杵とて抑り
こゝ成も有

スセ、
一 李

右同臥

明切 移う撓

梅杵かれ海へ一ひきの
入るもこれ花をさるる
るん

一 青

右同臥

明切 移う撓

梅杵より移うる

カラセ、
一 季

右同臥

夕切 移う撓

主り一ひの古野に

わの
山は峰をそ
うきふぬのり杵の
花

一 少杵

中々下臥

明切 移う撓

何首より成たり

るん

無

一 庭梅 見越 シ切 多横 多横

一 柳 真副法 シ切 火横

美名風うん草

ハ千世の柳ともふ

少老あゝと云々木柳と云

但十月二有と云々此月

と云々何少人云々と云々

立合と云々石と云々と

一 びん 柳 扣 多横

一 子花 結和 多横 多横

美名清海と云々の

後云可也と云々

一 林 摺 副扣流 多横

梅流と云々

一 岩 利子花 前星 多横 明印

一 山 平 菊 葉 前星 扣目所

一 小迷 ミナミ

副見越田所

まじりたふ常乃
てまじりたふ常乃

一 海棠 カイド

法流扣

火境 扣

梅片小こ枝あり

一 芙蓉 フヨウ

法扣
ありとあり

火境

一 芙蓉 フヨウ

田所

芙蓉は花の草

一 椿 ツバキ

花茎 木苗 田所

但義ふいふと詠さる上

千年ノ椿といふなり祝云

立意は軍陣の村城

中不立井法師入院

得成成場ふき山も

一 獨子こふふたふふ

も上りてふふふふ


ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

一漢

2
tp

一七海



和のこ
くもあやう

一石楠花

前卷

燈切

一長春

不為

同

一
百
五
十

法流

拓

枕切

一五七の巻

批

明切 少曉

一夢山水際

手執

何

祝彛編

一 荒 古 也

うとう
おのう
切

一
卷
在
也

大虎

一
梅
之
香

前星

夕切

元日ノ苑下地ノ志ヲ記ス

一 春菊 日引 日引

此は一束の水入を根を焼く
ものなり

一 梅の歌 真副 晴切
法流抄 印焼

少く不用物と真に云
お井の少く真にも云
以傳

一 江戸躑躅 法流 羽切
火焼

老境寺云云はくはく
もの却て云ふはくはく

一 蓮花 朝切
おまゝ 火焼
手焼

後より一徳也

一 山 晴切
おまゝ 火焼
折焼

一 菜 中々下
おまゝ 日引

一 小糸 朝切
おまゝ 日引
折木也

一山吹 副法根 増切 子鏡

青名かき草
ねもあけ草

法古のほちかけ草
とまらや

かみのもり
あし

一馬の柳 中略 夕切 子鏡

あまのくさ 子鏡
三月 美村いし 子鏡

一沃茂 右目 目

一氷水 入量 子鏡
美村いし 子鏡

一金風花 草 目
くさ 子鏡

一虎尾 草 目

一長布草 草 子鏡
あし 子鏡

一丁子草 草 子鏡
あし 子鏡

一 楊草

前巻 新印 子鏡
串を括弧する

一 母繁

おまゝ 旧印

一 年慶草

おまゝ 新印
子鏡

一 かゝる草

水際 旧印

串を括弧する
此字の因、おまゝ

一 おろく草

おまゝ 新印
子鏡

串を括弧する

一 おろく草

おまゝ 新印
子鏡

一 積草

水際 新印
子鏡

後巻に於て串を括弧する

一 金錢花

前巻 新印
子鏡

古田織部、常の生花が
ら編みたる名目ありと云ふ

卷之八
 卷之八
 卷之八

一
毛
方
法
草
每
夕
繞
曉
切

一白一花水陸新印手鏡
但之祿系六婦少色
若之るるるる用子有

一 芳 蜀 水 除 燈 切 多 燒

一、^ヤ名ありて志し草名 水学 田所
其名ありて草名
河東ありて志し草名
但し種ありて種あり
イニキリ草名ありて

一高^{カウライ} 茂子^{シイ} をこゝろ
美名^{ミナ} もどん草と云
花もかりきりなり
従い八月よりなる
常のけしきなり

一 ちこし花 草花 日取
串を結 つな ぎおく

一 火打り く ちやく 拍 おきふ
焼 印も焼

一 まぐま 割 日取

花ハ小角豆の花ハ
似たりといハ大形をいふと
似たりといハ

一 まえけ く 日取 日取

一 小糸花 日取 日取

一 蒲 フキノトウ 草花 日取
葉をいふと串を結

一 芦 草花 日取
女人貴姓 よて けり 草花
かきとていふ

一 日 ひ の 葉 草花 日取
串を結

一 赤草 アカ 日取 日取
日取能くいふと草花
種々

一 七重花 フトコロ 田所

目黒石くろくろ草また云
実を研ねくろくろ草別よ
あり

一 薔 フトコロ 咲切 大境

長方をさくも草をさく

一 忍 草 夕切 手鏡

串を指す

一 粟 草 新切 手鏡

一 著 莪の花 夕切

一 新 草 水際 田所

一 薔 草 梅 田所

一 毛 草 水際 田所

一 扛 草 新切 手鏡

是石をさく草と云
名目一用

一口ナラ 木ぬ 日ぬ
但千重と並フ様とて様と
いふぬと云ふ事ありと云ふ
傍の事

右如し

其之具

一栗 ^{シリ} 指 ^{タ切}
ねまゝに 手鏡

栗と云ふ事と云ふ事と云ふ
栗と云ふ事と云ふ事と云ふ
一服向ふ事と云ふ事

一山 ^{サツキ} 揆 副 焼印 右鏡

一と云ふ事と云ふ事と云ふ

一柘榴 副 ね 又切手鏡
梅鏡と云ふ事と云ふ事と云ふ
梅と云ふ事と云ふ事と云ふ
云不立合

一花柘榴 前星 日ぬ
梅鏡と云ふ事と云ふ事と云ふ

桂子散ニ用平の葉
と丸花をうりそを

一 柏

因所

但秋ともを事
前並りもて是

カメキ

一 櫻の葉流

因所

枝なりとニ葉を立

よは作を

わう

一 朴の葉

曉切手攪

張ひい細よを立合

一 木こねる葉を割 因所

一 葉も也

中々下
流もを

曉切
手攪

山なりといふ

一 卯の花

日大攪

美名ゆきみ草増え草
ほろろすあふ殿の
卯の花をいふ口作

一 木こねる葉

曉切
手攪

但このまゝのさる

一餅にし 前巻

切手
お籠

一巻に

お籠

切手

但しきりきりし

一巻に

お籠

切手

一巻に

お籠

切手

但しきりきりし

このきりきりし

一巻に

お籠

切手

但しきりきりし

このきりきりし

このきりきりし

このきりきりし

このきりきりし

このきりきりし

このきりきりし

このきりきりし

このきりきりし

一 紫葳 真深 根を煮 大塊
根拵 根煎 左

一 牡丹 根を煮 大塊

其石を煮 大草を煮
其九日方は云ふ但し
根を焼く 根を不焼
時より根を煮る 煮る
事

一 芍薬 根を煮 大塊
根を焼く 根を不焼

一 石竹 根を煮 大塊
根を焼く 根を不焼

一 黄芩 根を煮 大塊
根を焼く 根を不焼

一 薑 根を煮 大塊
根を焼く 根を不焼

一 松子 根を煮 大塊
根を焼く 根を不焼

一
子
在
氏
如
之
歌
夕
即
子
氏
氏

中分下美

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
葛蒲
上中下
輕夕切
中曉切

一 杜若 カキツバタ
日影
日影

墨名もあらず

著我たるを儲蓄に用

蓮花
石印

署名 津田 芳子

たをきく池に^{アル}入

根生をひきさへ

くきふて切る

秋
禁
厚
之
子

木と立人

一
九
五
七
年
五
月
廿
八
日

串之指之

一唐汝所
切手控

子知子之病也

美帝の花は、美多魚の

新福丁桂子

クワンゾウ

一 莞草 見越 新印 手続

禁裏に用ひたる草にて用紙

この草は

羊子付

一 杞子 向日

立花の西の草を多用
破る一紙西の草を多用

一 娘莞草 ふと 新印 手続

是の草はせんたい花
行縁の草は娘莞草といふ
著我ておまひ付

一 高野麻菜 正 夕切 手続

是の草は見草といふ
軍陣に付一葉根を焼
き入置る草を用ひ
但花の陰生し細成葉
先ス

一 河骨 草 新印 手続

古田織物に常なる草花も
は織物に用ひたる草

一 下野 見越 夕切 手続

り草ははらう草といふ
あひたるの
草ははらう草といふ

一花葛蒲 杜若 日圓

一百合草 乾 足越 夕切
あまこけ 多焼

君名老草

きや、花より二つ付しと
丁用ひのるふ草、上中と
もきふと 継書 新株 移
焼、あゝいさやう、
やとらとともきふ

一かくまねら 足越 日圓
たもひ

ひあゝととも云々の
あゝ、副にも用ひ

一其菊の乾 上中下 夕切 多焼
足越

足越、あ用根と焼、あゝ
入きふと 中流に
面、然るものゝあゝ
金

一鴈 カシ 鼻水 降 夕切 多焼

梅 焼、林と根と焼
きふと 割、あゝ
首のふや 移、あゝ
然るものゝあゝ

一節 カシ 黒 草 日圓

一たけ カシ 根 水 降 日圓

一 續断 草 日

あめしき云串と指

一 藤草 草 夕切 手 攪

あめしき云

一 草 草 日

あめしき云

一 山葵 水 攪

串と指

一 高麗菊 草 日

あめしき云串と指

一 野苣 草 日

あめしき云

一 秤 割 夕切 手 攪

あめしき云

あめしき云

あめしき云

あめしき云

一蜀黍 タウキ

真流硫

夕切
多焼
折焼

一ゆりのき カニ

煎茶

同

串を指さす

一粟添

同

うはあふれ入社に

うりき

喜のわくよあに

海

一露草水際

同

美名はらさき
串さき

一さしん 草 水際

同

串さき

一白木

煎茶

同

根を焼く

一雁雄 カニ

乙白

同

煎茶を移す

一古茶

草

同

一 せんまひ 和木 同

一 厚草 コウサウ 草 同
串をきく 草

一 山石梅草 草 水 火焼

石ハ 麦ノ 貝 以上

秋ノ 貝

一 白琴 又ルテ 真 夕切火焼

又名 膳軍木 膳木云
軍陳の時 用木
天竺 サツセツ 荏折 經婆
白膠 ニハ

一 和葉 真係和 和切火焼

真木 不毛 村ハ 少 用木
水ニ 能ハ け 量
草ハ 和ノ 用
真木 按 用

一 荷 すゐ

真副

夕切手鏡

長き石みくられ草

袖のふみ草云

一 尾花

同形

同形

長き石みくられ草

一 芦 ア

真副

同形

長き石みくられ草

長き石みくられ草

長き石みくられ草

長き石みくられ草

一 我々香副

同形

長き石みくられ草

長き石みくられ草

長き石みくられ草

一 かな

同形

同形

一 為香

水際

朝切

長き石みくられ草

長き石みくられ草

長き石みくられ草

長き石みくられ草

紙にて包き

一女市花見哉 見哉 夕切

高田織物 常乃
生花より色々様々
花市にて花あり

一沃指校 花菱 同以

一横校 花菱 同以

花名一重草
花菱にて花を併中真
目より花をとりて
用く 花を焼く

一木よの志草 同以

花をた云花菱
花を併用時中より花を
花を併用時花を併用
花を併用時花を併用

一塩金草 シラガ 花菱 同以

一散禧 脇の 同以

花菱にて花を併用
花菱にて花を併用
花菱にて花を併用
花菱にて花を併用

一宮城ミヤキの萩ハギ 旧山
根を焼く

一雞頭ケイトウ花真正 旧山
古田蔵部フルタクラベ常世生花よ
ら種し赤く移花より種を
二月に付て有

一忍ニドク冬 おまふ 旧山

一小車コクルマ 新玉を盛 旧山
宇ウ香カの草を信用

一仙セン羽花ハナ 中下
仙木をちみ 舊山

割あるはけきうきう
るれを移り割あるは
けきうきう花根を色に

一花ハナ 新玉を盛 旧山
新玉を盛

一虎イヌトリ枝の花 旧山

新玉を盛
あ

一 麝香モウコウ 日頃

一 藿香クハク 日頃

一 木引キヒキ 日頃

一 お草オウソウ の花 日頃

如人ニホヒト 之と 日頃

一 ばらバラ 日頃

一 山橋ヤマハシ 日頃

串と指と

一 お花 日頃

日頃

一 桜花アサカシ 日頃

一 お花 日頃

日頃

一 晝ヒル 日頃

一 夕顔 日 日

一 忍冬 スミカワラ 日 日

一 蔓珠沙花 水際 日

留りて好事

一 鳶草 ウツヒスサ 日 日

一 郎 ホトギスサ 日 日

一 萩 イハ 日

一 梔 カキ 用 夕 日

一 荏 アヲ 日

在ハ秋ニ具ル

冬之具

一南天 真深 枝は錢 夕切と攪

根を焼用 杉栲の

花三宜以竹と不て立合

一鹽 ヨロシ 花量 和 夕切と攪
おきふ 杉と攪

一海陸樹 三 流 杉切と攪

赤室より用茶の元捨
能きよりそふ

一桂 赤室 夕切と攪

一茶山花 おきふ 流 杉切

一海山 三ツヤ 櫓 おきふ 夕切

赤室より用茶の元捨
のりへと用茶の元捨

一海 おきふ 水 櫓 夕切と攪

後系は、いふやうな大名目
おきふ 赤室より用茶の元捨
杉と攪 夕切と攪

四季左道具

一松 上中下 切挽手挽

美名とくさ草屑

一柏枝 切挽手挽

一竹吹 切挽手挽

下挽手と用テ下挽

一秋 切挽手挽

女人と用テ下挽

是竹ハ流シテ用テ下挽

結子用ニ結テ下挽

と用テ下挽

神前ニ用テ下挽

色立ニ用テ下挽

一枇杷 上中下 シ切手挽

一梅 切挽手挽

シ切手挽

切挽手挽

切挽手挽

一 柏の葉 見哉 水陸月 多様

一 安 真正 法相 唯切 多様

一 栢 流相 同大鏡

移りこころ入る

一 櫟木 カシ 中下見合 同大

一 黄楊 ツゲ 多様 又切折櫟

一 白櫟 カシ 流相水陸 多様

一 三 アサ 櫟の木 少と 同大鏡

一 楊梅の葉 用あり 同大鏡

一 娘柳 サカキ 多様 同大鏡

一 娘櫟 サカキ 同大鏡

一 櫟 カシ 同大鏡

一 小蓮采 おもひき 日引

草木の中括くも若

一 薑躑躅 カワロヅシ 折焼

一 細摺色用 日引焼

一 燒茅以際 ヤサバサ 木敷草置 夕切

似布赤青のへきをひき

一 石草 ヒトツバ 日引

従弟に嫁ふ

一 垣衣 ヒノゲ 日引

一 金錢花用極子細草

一 鴈足 カヅ 日引

自深所用草木の中
立不若む枯くるハ
何方てもも若

一 芝草 日引

但前後は若の心引
串ヲ指一果より入
考ふ之何方指ても緑

切るなり 花の葉は

一 花の葉は ある 日

花の葉は ある 細成葉用

花の葉は ある

一 花の葉は ある 日

一 花の葉は ある 日

花の葉は ある

用たり

一 花の葉は ある 水階 日

花の葉は ある

一 花の葉は ある 日

一 花の葉は ある 日

花の葉は

花の葉は

花の葉は

暴用具

一 土草 一 牛房

一 弓 一 一

一 鷹 一 但湯

一 我 一 香

一 為 一 木

草木通用

一 山 一 橋

一 山 一 吹

一 岩 一 花

一 長 一 去

一 木 一 色

一 七 一 八

一 燒 一 草

祝儀下し禁物

一 苦海

浅の〜年海

あふ人は初

同の色は

浅〜花を

二

また〜手さう

んせはさ〜の

あ〜〜

一 馬^{アセ}蹄^ホ木 一 木凡

一 沉下花 一 茶の花

一 木^ト菊^{クサ} 一 石楠花

一 梅^{カミカシ} 色の子と〜花

を井の上入

一 梅^{ウチナシ} 毛^モ花^{ハナ}とぬる花

一 せ〜い 女^メ老^{ロウ}粧^{シヨウ}用

真^{マコト}ウカス伝

一 荊棘^{イハナ} ち〜る花 右日

一角子^{カウ} 色を物

一故人^ニ 風情を物

一獅子^ニ あれを牡丹

一馬牛^ニ 草

一山^ニ 山の平より遠き草花

一鳥^ニ 鳥の中より多し物
鳥は物に似し

けが心持てむく付む時を
お通をきくし月を待つ
（鳥）

一木を心とく草をとき

用たる時於不審なる者

古句曰

深遠雖為千尺松不如

冷頭一寸草

甚山の草の葉入るたけり
志されり

去年^{コゾ}より少松

初よりあられ

右より毛を付て竣工

及り肝要なり

十乃塩物なる

左長古瓶古今遠近

三木四草物元たる

毛子利十文字

拾三ヶ條法度

一 方角成相瓶指事

一 羊耳の五物記の指事

一 節羊耳ノ目より相指事

一 花乃 相と一瓶の四二

一 研トビ指事 從色ヲ智ニハ
め若ク

一 節のそ本と包本と草
と包る

一 花乃くく瓶のそ

但一からのもろよりなるハ
長々ねらう 從そも若き

一 要る 一とて切る

但遠近より

一 印指とて前指の
 一 礎指とて後指の
 一 印切とて水降て切の
 一 塙とて前也の
 一 龍の口と下枝葉の
 一 枝葉乃水降の

石山

名号一様事

右長左短とて長客者
 又曰右長左短ハ諸神
 法仙と心坎屋ハ陽
 陽の多と合鳥とて一指
 東南ハ陽と西北ハ陰と
 心庄教より方用遠
 と云々湯と云々

陽と陰と 法立心海
有たり生老病死
心修行はたふ^{あこ}子細^{みこ}
またいふ事南いあや
本より死にるは
そのつら山
云現在来年と云
ふ事行事要也

法立心海

右一書古先師
別名雖為秘書
其後年未出執
心する令傳授能
如る不の有他
者也^秘可^秘

寶曆二^壬申八月

竹田可竹

右之書古今又所
相傳也按卷平目
比依所全

天明六年四月廿三日

寫之者也

張井惠元

第四百廿一號		
寶曆元年		
流名	書信花立	天明六年四月廿三日
著	一冊	言、元惠井張年六
明治十四年三月	百六十年以前	



所著之書古今又所
相傳也按卷平目
比依所全

第一二三八號乙

寄 藤井咲子氏

凡此之書古今又所
相傳也按卷平目
比依所全

東京大学図書



0007325988

東京大学総合図書館

